

雑

録

新國際粗鋼カルテル（昭和8年7月14日附在獨今井商務書記官事務代理報告）國際粗鋼カルテル（International Rohstahl-gemeinschaft）は1926年に設立せられたるが、1930年以來カルテル統制力を全然喪ひ、僅に形式上の委在を續けたるのみなり。從て在ルクセンブルグ、カルテル本部は單に粗鋼に関する生産統計を發表し、各參加國の希望意見等を傳達する機關となれり。

該國際カルテル設立當初、カルテルによりて各國に割當られたる生産高は、其國の當時の國內販賣高及輸出高の合計を基準とせられたり。然るに其後獨逸は當國經濟界の好況を見、鐵に對する國內需要も旺盛となり、鐵生産高も著しく増加せる爲、獨逸は多額の生産割當超過違反金を支拂ひたり。獨逸の競争國たる佛蘭西殊に白耳義は此違反金の配當をプレミアムとなし、外國に於ける獨逸鐵市場にダンピングを試みたるを以て、獨逸の鐵工業は多大の損失を被りたり。

1930年以來經濟界の不況は愈々深刻となり、各國に於ける鐵製品の輸出高はもとより、國內販賣高も著減し、各國製鐵業何れも苦境に陥りたり。

元來獨逸の製鐵生産費は諸外國に於けるものに比し著しく高く、從て同品は外國品との競争に於て頗る不利の地位に置かれ、鐵製品の海外輸出は高級なる特殊品及臨時的なる露國よりの註文品供給に止り、其他は殆ど中止せらるゝに至れり。

以上の情勢の下に、各カルテル參加國はカルテル統制力を復活せしむ可く努力せるも、常に白耳義の不同意によりて挫折せり。白耳義がダンピングは之に依りて輸出を高め、國際カルテル復活の日に於ける自己の生産割當高を高めんとする意圖に出たるものなれども、夫れに伴ふ損失甚だしく、白耳義は斯る犠牲を長期に亘つて耐へ得ざるを自覺するに至れり。

鐵價は最近に於て著しく暴落し、戦前不況時の半なりと傳られ居れり。1932年秋季以來鐵市場安定の目的を以て國際協議行はれ居りし處、1933年5月に至り、新國際カルテル成立せり。

新國際粗鋼カルテルは其の組織に於て舊組織と異なるは、參加國に於ける粗鋼生産高を一定の割當率によりて統制することを廢止し、輸出高のみを統制せんとするにあり。即ち舊來の Internationale Rohstaalgemeinschaft は今回事實上に於ては Rohstahl-Export-gemeinschaft となれる次第なり。

獨逸側は獨逸の粗鋼カルテルに倣ひ、包括的な國際販賣機關を設く可しとの意向なりしも、協議に於て採用せられず、若干の延鐵製品に關してのみ特別の販賣機關設置せらるゝことゝなれり。帶鐵に關しては國際統制及決済機關設置せられ、以上の統計の作製其他の事務を執行するものなり。

更に製品6種に對する販賣所設置せられたるが、半製品に對するものはリエージュに、型鐵に對するものは巴里に、棒鐵に對するものはルクセンブルグに、板鐵、ブリキ、ユニバーサルアイゼンに對するものはデユツセルドルフに、夫々設立せられたり。

延鐵製品中には販賣機關によりて統制せられたるものを相當存在するを以て、前記販賣所の統制のみを以てしては、統制外製品の増産を見、延鐵製品割當の目的達せられざる處あるを以て、特に延鐵製品全體は鋼の重量に換算せられて、其總割高決定せられたり。

延鐵製品割當高の決定は、獨逸に於けるが如く、各製品に付きカルテルの存在する場合は別として、然らざる國に於ては相當困難なり。

各國割當率は目下の處不明なるも、獨逸は半製品に於て其輸出額の23%、型鐵に於て27.5%、棒鐵に於て29%、ユニヴァサルアイゼンに於て52%、板鐵に於て46.5%、薄板鐵に於て28%の決定を受けるものと觀られつゝあり。

本カルテル協定の有効期間は5箇年と定められ居れり。而して特別の事情の生じたる場合には其期限内に於て解散するの規定あり。

新國際カルテルに加入せる國はルクセンブルグ、佛蘭西、白耳義及獨逸なるが、本カルテルの効果を以て充分ならしむる爲には、更に進んでアウトサイダーたる諸國を加入せしむるにあり。1926年の協定にはチエツコスロヴァキア、奧地利、洪牙利の中歐諸國參加し、後に至り羅馬尼、ユーゴスラヴィアも亦參加せるを以て、近き將來に於ける此等諸國との交渉も期待せられ居れり。波蘭の態度はアウトサイダーとして東南歐洲に於て自由に活躍せんとするものと觀られつゝあり。

最も重要な英吉利の態度なるが、同國は保護關稅を設定せる一方オッタワ會議によりて帝國內の利益は充分に保護せられ居るを以て、大陸協定に参加するものと想像せられ居れり。英吉利は半製品の購入國なるのみならず、ブリキ板の輸出國なるを以て、當該カルテルの價格決定には大なる關係を有するものなり。

北米合衆國は國內市場の恢復に忙しく、日本は最近歐洲市場へ進出し來れるも、之亦當分歐洲市場を脅す程度には立至らざる可く、從て國際カルテルに歐洲以外の諸國より脅さるゝ危險は無きものと觀測せられ居れり。然れどもカルテル内部に於て特に白耳義國內の企業統一にして所期の如く進まざる場合には、佛蘭西、獨逸の利益は著しく脅され、カルテルは崩壞の運命を見ることなきを保し難しと觀る向も有之次第なり。

國際カルテル成立の報傳はるや、鐵鋼市場は多少活況を呈するに至れり。
（海外經濟事情 6年 34號）

勃牙利最近一般財政經濟事情の中鐵業の部抜華

（昭和8年6月13日附在土村上臨時代理大使報告）

鐵業 勃牙利には全國到處に石炭を始め他の鐵產物相當豊富に埋藏せらる。地下埋藏物の調査に付ては豫め其調査區域を指定して主務省の許可證の下附を受けるを要す。而して其調査完了の上其發見鐵區の探掘コンセツションを得べく、而して其の許可條件次の如し。

（1）發見埋藏物の探掘は成功可能なることを證すること。

（2）次記税を支拂ふこと。

（イ）コンセツションの申請に對しては5,000 レバ

（ロ）鐵石又は岩鹽に付てはヘクタール當り毎年18 レバ又瓦斯

若くは石炭に付ては15 レバ

（ハ）生産高の1%

最近の調査に據ればコンセツションの下附を受けたるもの僅に39件に過ぎず、即ち次表の如し。

石炭	33	アルミニウム及アルム	1
銅	4	計	39
鉛、銅及亞鉛	1		

1926 年乃至 1931 年中採掘せられたる鐵產物の種類及重量(噸)を表示すれば次の如し。

年次	石炭	銅	鉛	亜鉛	錫	鉛銅	鹽	アルミニウム
1926 年	1,205,758	35,536	11,211	425	—	—	1,284	1,889
1927 年	1,237,646	10,934	1,229	1,495	6,720	16,789	3,982	2,841
1928 年	1,430,326	10,913	1,324	2,340	14,762	8,787	4,103	2,742
1929 年	1,651,819	31,370	1,983	1,925	11,396	9,923	3,653	3,613
1930 年	1,593,041	27,448	—	—	2,762	9,737	1,704	5,747
1931 年	1,529,541	900	—	—	—	—	3,900	1,382

多數の炭鐵中重要なるものは官有に屬し、其採掘は次の通り。

(單位噸)

1929 年	1,390,496	1931 年	1,231,697
1930 年	1,344,956	1932 年	808,931
		1 月乃至 7 月	

工業 勃牙利は前述の如く農業國にして、工業の發達は猶遅々たるを免れざるも、或特定の工業は勃國法令の規定並同國に輸入せらるゝ外國品に課せらる半保護關稅の利益を享受し、企業上有益なる條件を具備するもの尠からず。例へば 1930 年の調査に據れば、此種の特種利益を享くるもの次の如し。

金屬工業	120	織物工業	196
製粉工業	92	製革工業	37
化學工業	135	製紙工業	4
飲食料品製造工業	437	電力工業	9
木製品工業	57	計	1,087

而して以上特殊企業は、1931 年には幾分減少して 1,060 となり、又 1931 年 12 月 1 日現在に於ては 1,025 を算へ居れり。

工業保護の爲制定せられたる特別規定に依り、勃國特殊工業の享くる權益を示せば次の如し。

- (1) 工場敷地及建築に對する國稅の免除
- (2) 若干の地方營業稅の免除
- (3) 機械類、原料品及半製品の輸入稅免除
- (4) 製品に對する國有鐵道運賃の 2 割 5 分、再輸出品に對する 3 割 5 分の割引

1930 年中前掲企業に對する投資額は 69 億 3,100 萬レバにして、之に従事せる労働者数は 3 萬 8,000 に上れり。而して勞銀は 1 人 1 日平均 60 乃至 65 レバにして、其消費せる原料品價額は約 40 億レバ、内約 27 億レバは他國よりの輸入に係るものなり。又生産に要せる燃料の消費高は 2 億 2,000 萬レバにして、内 5,700 萬レバは之を輸入に仰げるものなり。尙勃國工業製品の對外輸出額は 1929 年中 2 億 6,750 萬レバ、1930 年中 2 億 1,400 萬レバを算す。而して其製品總價格は前記工業獎勵法の利益を享け、1930 年には 65 億乃至 70 億レバと評價せらる。此等の實績に徴し勃國の將來に於ける工業の發達は相當注目すべきなり。(レバは昨今の爲替相場にては大約 83 レバは佛貨 12 法 6 仙に該る)

労働問題 前述の如く勃國に於ける工業の發達は猶遅々たるものありて、其の熟練労働者数の如きも極めて少數にして、1931 年末現在に於て商工業、運輸、其他の營業に従事する熟練及不熟練労働者数は僅に 14 萬 5,000 餘人を算ふるに過ぎず。

勃牙利の労働法及工業法は労働者特に少年労働者の保護に最意を用ゐ 14 歳以下の兒童に對しては労働に従事することを禁止すると共に、16 歳以下の者と雖或る特定の重工業に労働するを許されず。又 18 歳以下の者を鑛山、隧道、運河の諸工事、其他無經驗労働者に危険性多き工事に使役することを禁ぜらる。8 時間労働制は嚴守せられ、保健上危険を伴ふが如き企業に付ては、其労働時間は 6 時間に短縮せらる。婦女及 18 歳以下の年少者の夜業は禁止せらる。

尙 10 時間以上の労働を必要とする企業に對しては、附屬醫師設置を命じ居れり。雇傭者は男女共椿事、疾病、妊娠、老齡等の場合に於て保障せられ、之が爲特殊の「社會保險」基金制あり。本基金の財源は雇傭者及國家の共同積金に依るものとす。又失業基金は使用者側、雇傭者側及國家の三者の積金に依り、妻帶者は 1 月 16 レバ、獨身者は 10 レバを受くるものとす。

尙茲に一言を要するは勃國の強制労働制なり。勃牙利はヌイニ條約に依り其正規兵及警察官數は 3 萬 3,000 人を超過するを得ざるの制限を附せられたる處、當時のスタンプリスキー政府は 1920 年強制労働法を公布し、一面以上兵力量の缺陷を補充すると共に、他面國民一般の労働に對する情操を涵養し、社會各階級の共同一致の美風を鼓吹せんとせるものなるが、爾來正に 12 年、其成績極めて觀るべきものあり。一般經濟的發展の爲、又政府の財政の緊急に應ずるを圖る上に於て大なる効果を擧げつゝあり。伊、獨、佛、洪等の諸國より専門家を派して其實績を研究視察せしめ、何れも其效果多きに驚歎せり。以上勞役を課せらるゝものは滿 20 乃至 40 歳の男子にして、其期間は 8 箇月なり。強制勞役は主として鐵道の布設、堤防の造築、森林の伐採、水路の整定、道路の改築、橋梁の架設、池沼の疏鑿等の土木工事に利用せられ居れり。勞役従事者は土木省より被服、食料、宿泊所及器具類の供給を受くるも、特に定給を支給せらるゝことなし。

次表は強制勞役の實績を語るものなり。

1. 國道(橋梁 450 を含む)の開設 3,020 軒
2. 勃牙利國有鐵道(橋梁を 163 含む)の建設 550 軒
3. 鐵道枕木 1,000,000、電柱 350,000、鑛坑支柱 35,000 の製作
4. ダニューブ河兩岸大堤防工事
5. 大沼澤地の干拓工事 (海外經濟事情 6 年 36 號)

伊國鑛產物 (昭和 8 年 8 月 1 日附在米蘭井上領事報告) 伊國の鑛產は其農業に次で古き歴史を有し、又主要なる資源の一である。勿論近代工業の必需原料たる石炭と鐵とに乏しき爲、所謂鑛產國として貧弱なる國と目せられつゝあるも、其他の鑛產物に就ては決して輕視す可からざるものがある。即ち伊國統一當時の 1860 年頃の統計に依れば、次の如き鑛產成績を示して居る。(噸)

硫黃	157,599	鐵	82,708
銅	32,621	鉛	10,407
褐炭類	30,280	硫化鐵	1,960
錫	163	水銀	34

然るに 1930 年には次の如くである。(噸)

鐵鑛石	718,100	硫化鐵	717,300
錫鑛石	200,700	鉛鑛石	49,900
銅鑛石	17,700	水銀	1,900
硫黃	370,300	褐炭類	808,000
石油	7,800		

又其價格は 5 億 8,900 萬利と見做して居る。(1870 年頃の價格は 5,000 萬利、又 1910 年には 8,000 萬利と見積られたり)

尙 1931 年末に於て伊國には鑛坑及試掘坑數 946 ケ所存在し、何れも活動しつゝあるが、其内 634 ケ所は生産的にして 303 所は不生産的のものと云はれる、又當時鑛業に従事する職工、坑夫は 38,651 人にして、内 23,822 人は鑛坑内に働き、14,829 人は坑外の労働者である。

次に鑛坑の設備は近來著數改善發達し、1931 年末には總馬力 68,331 に達し、モーター數は次の如し。

水力に依るもの	31 箇	(6,244 馬力)
動物力に依るもの	13 "	(17 ")

電	力	2,651 箇	(49,082 馬力)
蒸	氣	101 "	(6,808 "
瓦	斯	100 "	
壓搾空氣に依るもの		34 "	(前者と併せ 2,922 "
ペンジンに依るもの		19 "	
鑛油に依るもの		57 "	(前者と併せ 3,285 "

鑛物の生産地としては第一にサルジニヤ島なるが、本島よりは鉛及錫を始め銀、アンチモニーを産し、又鐵、銅の鑛山あり、イグレシエンテの褐炭及ヌオーロ地方の其煙炭は著名である。次にシチリヤ島には、主産物硫黄(160 鑛坑あり)の外豊富なるアスファルト性岩石あり。

トスカナ州よりはエルバ島の鐵(全國産鐵の8割を占む)、モンテ・アミアータ及イドリヤの水銀(今や水銀産地としては世界第2位を占む)の外褐炭、硫化鐵等を産す。

ピエモンテ州は鐵鑛石、硫化鐵、石墨、泥灰石、褐炭、錫、銅を産出す。

三ヴェネチヤ地方よりは多量の鐵礬土、水銀、錫、鉛、褐炭を産す。パルマ及ピャチエンツァ地方よりは漸増的に石油を産す。ロンバルジニヤ州よりは錫、石棉を産出す。

リグリア州には硫化鐵、滿俺鑛あり。

以上伊國の鑛産中水銀、硫化鐵及硫黄は何れも世界第2位を占めて著名である、而して外國に輸出せらるゝ主なる鑛物は硫黄、水銀、硫化鐵、鐵鑛石、滑石及び石油等で、1930年には其輸出額3億利に達した。(海外經濟事情 6年 36號)

瑞典鐵鋼業の燃料問題 (Iron and Coal Trades Review, July 7 1933)

1. 鉄鐵の生産と木炭—瑞典鉄鐵の大部分は松材の木炭を唯一の燃料として鑛鑛爐に於て生産せらる。電氣鉄鐵爐に於ては木炭の若干は電氣力に依つて代用せられ、此の場合に於ける木炭の消費高は鑛鑛爐に於ける消費高の45~50%に過ぎない。電氣鉄鐵熔解の將來の發達は市場狀態と電力の價格に依つて左右せらるるであらう、最近10年間木炭の價格は上向き一方であつた、こは主として以前木炭の生産のみに使用された木材が現在では木材パルプ工業に分割されねばならぬ事情に在るが爲めである、然しながら此の競争は今や或る均勢狀態に達して居るものゝやうである。大戰前の數年間に於ける瑞典鐵鋼業の木炭年消費高は4,000,000 m³を稍々越へて居つたが目下は著しく減じて此の數字の半數以下に下つて居る。目下木炭の約15%は固定式副産物窯で生産せられ、約85%は今尙積み累ね焼で生産せらる。窯で焼かれる木材の約30%と積み累ね焼木材の約20%は製材工場の廢物から成つて居る。然しながら此の木材は目下漸増的にパルプ工業に依つて吸収されつゝあるを以て將來は此の所謂ラスコール(lath coal)の量を減額して見積るの必要があるであらう。ラスコールは幾分芬蘭から輸入せらる。窯焼木炭生産の經濟を改善するの目的を以て瑞典王室工業調査學會の木炭研究所に於て數年間研究調査が行はれ來つたが其の費用は前記の學會と瑞典製鐵業者組合及び或る一大木炭會社から支辨されるものである。此の研究事業は、より良品副産物の製出を併せて研究するものであつて既に優秀な結果を得て居る。

2. 鐵生産の直接法—瑞典に於ては高級鋼を生産する爲めには木炭のみを燃料として作られた鉄鐵及び此の鉄鐵から生じた屑のみが使用せらる。此の種屑の供給不十分なるが爲め最も重要な製鋼法即ち酸性平爐法に於ては經濟的範圍以上に多くの鉄鐵が使用せらる。故に瑞典は木炭鉄の價格よりも低廉な價格に於て鐵石から直接還元

することに依つて作らるる所謂スポンヂ鐵生産の企に非常に關心を持つてゐる。1911年以來スポンヂ鐵はSkaneのHöganäs工場に於てGellivare鐵山の選鐵から生産されて居る、其のスポンヂ鐵は約95%の鐵と0.010%の磷と最高0.020%の硫黄を含む、而して此のスポンヂ鐵は高價にも拘らず數ヶ所の製鋼工場に於て或る程度まで使用されて居る。近年スポンヂ鐵生産の新方法に關し多様の實驗が行はれた、其の内Wiberg及びEkelund法は瓦斯を以て還元しKalling法に於ては固定炭素を還元要素として居る。Wiberg法に於ては還元瓦斯の一部は電氣加熱木炭生産爐に於て復生せられ一方Ekelund法に於ては瓦斯は石炭及骸炭で點火さるる發生爐から得られる。Kalling法に於ては鐵石と石炭との粉末混合が電流に依つて反應溫度まで熱せらる。是等の新方法に對する實物大の工場は未だ建設されてゐない、然し計算及實驗からすれば低廉なスポンヂが得らることは明かである、而して若し目下酸性平爐に使用せらるゝものよりも低割合の鉄鐵と共に電氣爐にて熔解さるゝとせば高級鋼を製出することが出来るであらう。

3. 平爐法に依る製鋼—鹽基性平爐に於ては主として普通鋼が生産せられ機械及建築鋼として國內市場に販賣せらる。此種の平爐に對する燃料は輸入の化石介在石炭(Fossiliferous coal)を以てする發生爐瓦斯である。酸性平爐に於ては前述の通り主として工具鋼並低度の合金特殊鋼の高級鋼が生産せられ、使用燃料は古くから鋼の硫黄含有分を最低ならしむる爲め木材或は泥炭を以てする發生爐瓦斯が用ひられて居る。硫黄分がさまで重要ならざる場合に於ては石炭も亦使用せらる。平爐に對する其他の燃料として鑛鑛爐瓦斯の利用せらるゝこともあるが此の場合に於ては發生爐瓦斯の約20%が節約せらる。作業中止中爐を温め置く爲めには鑛鑛爐瓦斯のみが使用せられ得る。電氣鉄鐵爐からの瓦斯は僅少の窒素を含むのみであつて1m³當約2,200 kcalの發熱力を有す、本瓦斯は平爐の主要燃料として使用せらる。石炭又は木材を以てする少量の發生爐瓦斯が附け加へられ而して自熱焰を得る爲め及び此れに依つて熱の移動を増進する爲めに冶金過程の或る期間中水蒸氣に依つてタールが投入せらる。

平爐からの煙道瓦斯の熱量は若干の製鋼工場に於ては蒸氣發生に利用せらる、此の蒸氣は先づ第一瓦斯發生爐用空氣の追加として爐に使用せられ、然る後更に附近の加熱用に使用せらる。平爐は一般に15 噸乃至20 噸チャーヂの少型で外國の平爐に比較して作業の速度遲鈍なるが爲め利用せられ得る煙道瓦斯の熱量は比較的小量である。瓦斯發生爐が木材にて點火さるゝ場合は、煙道瓦斯は木材乾燥用並に發生爐空氣の加熱用に使用せらる。發生爐空氣の200°Cの溫度は瓦斯發生に對し有利である、何となれば得られた瓦斯は少量の炭酸と多量の水素を有して居るからである。鋼1 噸の生産に對し木材の消費高は2.1 乃至2.3 m³である。

4. 壓延、フォーヂ及熱鈍用鋼の加熱—加熱爐用の燃料は石炭であつて石炭は直接爐に連結する發生爐に挿入せらる、然し時には爐は發生爐のバッテリーからの瓦斯で熱せらるゝこともある。石炭の間歇的挿入を以てする舊來の構造が今尙一般的に使用されてゐるか最近10年間に於て燃料の繼續的挿入とスラグの繼續的抽出とを以てする新構造が採用せらるゝに至つた、こは極めて一様の成分と溫度とを有する瓦斯を與へ又極めて勞力を節約するものである、是等の爐を電氣爐瓦斯を以て點火すべく企てられたが然し此の瓦斯は燃え方緩慢で豫熱室の後部で得らるゝ溫度が高い。こは軟鋼が熱せらるゝ際には爐床表面1 m²當り爐能力が増加するが爲め有利であ

る、然しながら硬鋼を熱するには此の瓦斯は用ひられない、何となれば材料から炭素が除かれ過ぎるからである。ブローチング用加熱爐から出づる煙道瓦斯は約 1,000°C の温度を有す、故に其の熱量の一部は一般に蒸氣發生用ボイラーに利用せらる。壓延用加熱爐は逆流主義に於て推進式に構造されて居る、故に煙道瓦斯の温度は其れをボイラーに利用するにはあまりに低く過ぎるのである。或る場合に於ては、二次空氣の豫熱に使用せられ之に依つて燃焼が容易となり燃料の經濟が得られる、又或る場合に於ては、ランカーシャー鐵が鍛接さるゝ時の様に爐に於て充分なる鍛接熱を得んが爲め二次空氣の温度を約 200~300°C まで引上げる必要がある。最新式の空氣加熱器は直徑約 75 mm の耐熱クロム鋼管で作られ羊腸的に褶まれて爐後端下の一室に置かれてある。鋼鑄物、プレート等の焼鈍に對しては移動爐床を有する爐が使用せられ、木材又は石炭からの發生爐瓦斯で點火される。高度の炭素量を有する炭素鋼の低焼鈍に對しては、球入軸承鋼の如き合金鋼の焼鈍と同様以前は銻鑄爐瓦斯又は發生爐瓦斯が使用されて居つた、而して銻鑄爐瓦斯の方が發熱力低い爲め適當と認められて居つた。現在では主として電氣爐が設置されて居る。

5. 熱源としての電力—瑞典鐵鋼業に於ては、銑鐵の電氣熔解に初めて本格的に電氣が使用されたのである。A. B. Elektrometall の電氣銑鐵爐の建設は、25 年前の木炭問題の不安状態と密接な關係がある。1907 年から 1909 年に至る Domnarfvet に於ける實驗に基き實物大の實驗爐が 1910 年瑞典製鐵業者組合に依つて Trolhättan に建設された。而して數多の瑞典工場は此の爐に於て混合鑛石を熔解せるが其の結果は品質の點より見て有望であつた。爐は其の後最寄りの製鋼所から買収せられ、暫くして第二爐が同一場所に建設された。1912 年から 1917 年に至る年間に於て Hagfors に 5 基建設せられ、又 1912~1919 年の年間に於ては Domnarfvet に 4 基、1914 には Söderfors に 1 基、1918 年には Porjus に 2 基、最後に 1932 年に於て Degerfors に 1 基建設されたが其の内現在操業中のものは Hagfors, Domnarfvet 及 Degerfors の爐のみである。世界大戰と其の結果は電氣銑鐵爐の發達を妨げたのであつた。前述の通り最近年間に於ては主として普通銻鑄爐に於て木炭の消費量を低下せしむることに關心が向けられて居る、而して此の仕事は可なり成功を収めつゝあるが爲め現状の下に於ては電氣銑鐵熔解を急進するの理由が認められないのである、然し此の方法は再び木炭の缺乏と價格高とが製鋼業者をして森林資源に對する彼等の要求を低減せしむる場合は何時たりとも再開せらるゝであらうことは言ふまでもない。電氣鋼の生産は逐日地歩を進めつゝあるが若し高周波誘導式爐に於ける熔解にして其の約束を取り戻す場合に於ては一層迅速に地歩を進むるであらう。此種の爐は目下 4~5 吨チャーチの大きに於て建設せられ銑鐵、屑及スポンジ鐵の混合を高級鋼に精鍊して居る、然し其の結果はまだ決定的に判明してゐない。普通鋼の生産に對し電氣アーク爐が鹽基性平爐の領域を逐日侵しつゝある。普通鋼を生産する瑞典 Domnarfvet の最大製鋼所に於ては鋼の大部分は目下鹽基性ベッセメ法に依り生産されてゐるが其の一部は 25~30 吨の電氣アーク爐にて精鍊されてゐる、此の爐は亦屑の熔解にも使用されて居る。熱間壓延又は鍛鍊さるべき鋼の加熱に對しては電氣は未だ使用されてゐない、而して此の方面に於ける發達は近き將來には望み得られない。此れに反し電氣燒鈍爐の重要性は急速に増加しつゝあるが就中バンド、ワイヤーの如き冷間作業材料の熱處理に對して特に然りである、此の爐は單純で、作業容易で且作

業費も低廉である。脱炭素を妨止する保護瓦斯は是等の爐に使用し得る。電氣爐は亦燒入さるべき鋼の加熱にも適してゐる。第 1 表は瑞典鐵鋼業の熔解目的に對する電力の消費高を示す。

第 1 表

年次	銑 鐵 キロワット時	鋼 キロワット時	鐵合金 キロワット時
1920 年	175,5·10 ⁶	—	100,6·10 ⁶
1921 年	152,5·10 ⁶	—	47,7·10 ⁶
1922 年	100,0·10 ⁶	—	105,9·10 ⁶
1923 年	132,2·10 ⁶	25,9·10 ⁶	124,9·10 ⁶
1924 年	232,7·10 ⁶	36,1·10 ⁶	145,4·10 ⁶
1925 年	218,8·10 ⁶	37,0·10 ⁶	213,0·10 ⁶
1926 年	212,2·10 ⁶	34,9·10 ⁶	225,0·10 ⁶
1927 年	191,1·10 ⁶	51,1·10 ⁶	280,0·10 ⁶
1928 年	188,2·10 ⁶	68,6·10 ⁶	332,0·10 ⁶
1929 年	218,2·10 ⁶	86,5·10 ⁶	294,4·10 ⁶
1930 年	226,9·10 ⁶	84,4·10 ⁶	291,6·10 ⁶

備考 銑鐵の場合に於て 1922 年以降の數字は概算

瑞典の鐵鋼業に於ては電力の供給量を増加せんが爲め近年引き續いて投資を行へるがこは斯業の電力消費高が熔解並熱處理目的に對し増進するであらうことを確信せるが爲めである。

註—本論説はストックホルム瑞典製鐵業者組合主任技師 Arvid Johansson 氏の世界動力會議スカンデナヴィヤ部會に於ける提出論文から取れるものである。(M. M 生譯)

日本製鐵株式會社に關する勅令

朕日本製鐵株式會社法施行期日ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御 名 御 璽

昭和 8 年 9 月 21 日

内閣總理大臣 子爵 齋 藤 實
大 藏 大 臣 高 橋 是 清
陸 軍 大 臣 荒 木 貞 夫
商 工 大 臣 男爵 中 島 久 萬 吉
海 軍 大 臣 大 角 岑 生

勅令第 243 號

日本製鐵株式會社法ハ昭和 8 年 9 月 25 日ヨリ之ヲ施行ス

朕日本製鐵株式會社法施行令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御 名 御 璽

昭和 8 年 9 月 21 日

内閣總理大臣 子爵 齋 藤 實
大 藏 大 臣 高 橋 是 清
陸 軍 大 臣 荒 木 貞 夫
商 工 大 臣 男爵 中 島 久 萬 吉
海 軍 大 臣 大 角 岑 生

勅令第 244 號

日本製鐵株式會社法施行令

第 1 條 商工大臣ハ日本製鐵株式會社法第 16 條ノ規定ニ依リ日本製鐵株式會社ニ對シ左ノ事項ヲ命ズルコトヲ得

1. 製鐵所ヨリ引繼ギタル從業者ノ解職ノ場合ニ於テハ商工大臣ノ定ムル所ニ依リ其ノ者ノ引繼前ノ勤續年數ヲ其ノ者ノ引繼後ノ勤續年數ニ通算シテ算定シタル手當金ヲ支給スベキコト
2. 製鐵所ヨリ引繼ギタル從業者ノ共済組合ニ對シ政府ガ從來製鐵所共済組合ニ對シテ爲シタル給與ノ割合ヲ基準トシテ商工大臣ノ定ムル所ニ依リ算定シタル給與ヲ爲スベキコト
3. 前 2 號ノ外製鐵所ノ從業者ノ引繼ニ關シ其者ノ待遇其ノ他ニ付必要ナル事項
4. 昭和 4 年法律第 28 號及昭和 5 年法律第 3 號ニ依リ製鐵所特

別會計=屬シメラレタル債權債務ヲ一般會計ガ承繼シタル場合=於テ其ノ債權=付辨濟トシテ政府ノ毎年度受取リタル金額ガ其ノ債務ノ辨濟トシテ政府ノ當該年度=於テ支拂ヒタル金額=達セザルトキハ其ノ不足額=相當スル金額ヲ政府=納付スベキコト

第2條 日本製鐵株式會社法第17條ノ損失ハ左ニ掲グルモノトス

1. 日本製鐵株式會社法第9條ノ規定ニ依リ保持ヲ命ゼラレタル鐵鑛其ノ他ノ製鐵原料ニシテ命令ヲ以テ定ムルモノノ取得ニ要シタル資金ノ利息ニ相當スル金額
2. 日本製鐵株式會社法第9條ノ規定ニ依リ命ゼラレタル特殊ノ研究ニ要シタル費用ニシテ命令ヲ以テ定ムルモノ
3. 前條第1號ノ規定ニ依ル命令ニ依リ支給シタル金額ノ中商工大臣ノ定ムル所ニ依リ其ノ支給ヲ受ケタル者ノ引繼前及引繼後ノ勤続年數及俸給又ハ給料其ノ他ヲ參酌シテ引繼前ノ勤務ニ對スルモノトシテ算定シタル金額

前項第1號ノ資金ノ算定方法及利息ノ率ハ商工大臣之ヲ定ム

第3條 陸軍大臣又ハ海軍大臣日本製鐵株式會社法第9條ノ規定ニ依リ軍事上必要ナル命令ヲ爲サントスルトキハ商工大臣ニ協議スベシ

第4條 商工大臣、陸軍大臣又ハ海軍大臣日本製鐵株式會社法第9條ノ規定ニ依リ日本製鐵株式會社ノ經理ニ影響ヲ及ボスベキ事項ニ付命令ヲ爲サントスルトキハ大藏大臣ニ協議スベシ

第5條 左ノ場合ニ於テハ商工大臣ハ大藏大臣ニ協議スベシ

1. 日本製鐵株式會社法第10條ノ規定ニ依リ資本ノ増減其ノ他重要ナル事項ニ關スル定款ノ變更、利益金ノ處分、社債ノ募集、合併若ハ解散ノ決議又ハ商法第212條ノ2ノ決議ノ認可ヲ爲サントスルトキ
2. 日本製鐵株式會社法第11條若ハ第27條ノ規定ニ依リ認可又ハ第16條ノ規定ニ依ル命令ヲ爲サントスルトキ
3. 第2條第1項第1號ノ資金算定方法及利息ノ率又ハ同條同項第3號ノ金額ノ算定方法ヲ定メントスルトキ

第6條 日本製鐵株式會社ノ決算ハ會計検査院ノ検査ヲ受クルコトヲ要ス

附 則

本令ハ日本製鐵株式會社法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

參 照

昭和4年3月29日公布法律第28號ハ製鐵所特別會計ニ於テ大藏省預金部ノ橫濱正金銀行ニ對スル債權ノ讓渡ヲ受クルコトニ關スル件、同5年5月17日公布法律第3號ハ製鐵所特別會計ニ於テ大藏省預金部又ハ日本銀行ノ橫濱正金銀行又ハ株式會社日本興業銀行ニ對スル債權ノ讓渡ヲ受クルコトニ關スル件ナリ

朕製鐵事業評價審査委員會官制ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御 名 御 璽

昭和8年9月21日

內閣總理大臣 子爵 齋 藤 實

商 工 大 臣 男爵 中 島 久 萬 吉

勅令第245號

製鐵事業評價審査委員會官制

第1條 製鐵事業評價審査委員會ハ商工大臣ノ監督ニ屬シ日本製鐵株式會社法第12條及第27條第2項ノ規定ニ依リ其ノ權限ニ屬セシメタル事項ヲ調査審議ス

委員會ハ前項ノ外商工大臣ノ諮問ニ應ジ日本製鐵株式會社ノ讓渡

シ又ハ讓受クル重要財産ノ評價ニ付調査審議ス

第2條 委員會ハ會長1人委員20人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

前項定員ノ外臨時必要アル場合ニ於テハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第3條 會長ハ商工大臣ヲ以テ之ニ充ツ委員及臨時委員ハ商工大臣ノ奏請ニ依リ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

第4條 會長ハ會務ヲ總理ス

會長事故アルトキハ商工大臣ノ指名スル委員其ノ職務ヲ代理ス

第5條 委員會ニ幹事ヲ置ク商工大臣ノ奏請ニ依リ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第6條 委員會ニ書記ヲ置ク商工大臣之ヲ命ズ

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附 則

本令ハ日本製鐵株式會社法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

古又は屑銅、眞鍮、鉛、鐵輸出禁止に關する天津海關告示

(3月30日付在天津藏重貿易通信員報告、商工省貿易局) 天津海關ハ8月30日附告示第933號を以テ次の通り布告した。古又は屑銅、眞鍮、鉛、鐵は今後輸出を嚴禁す。次記のものは本告示により輸出を禁止す。

1. 銅、眞鍮、鉛、鐵の半製品(板、條、片、棒等)及び完製品(線、繩、管、機器部分品、銃砲のケース等)の破砕せるもの又は古物にて直接使用出來ぬもの
2. 銅、眞鍮、鉛、鐵の灰、屑、片等の金屬原料及加工廢物

智利國產金狀況(昭和8年6月19日附在智玉木臨時代理公使報告) 曩に智利政府は失業者救濟の一策として砂金採取業を獎勵せる結果、同砂金採取業の擡頭し來たりたる處、其後智貨價值下落に因る同業の有利化と、以上政府の積極的獎勵政策とが相俟て當國產金業は一般と活氣を呈すに至り、1933年3、4兩月には月産330kg臺に達し、當國產金界の最高記録を残すに至れり。而して是等產金業中最目醒發展を見せたるものは、前記政府の獎勵する砂金採取業なり、砂金産額は1931年迄は全產金額の1割にも達せざりしが、1932年に至り俄然4割3分弱となり、產金界に最重要なる地位を占むるに至れり。之個人的且無資本にて小規模に營み得ると政府の統制宜敷を得たるとに依るものなるが、以上は政府の各種失業者救濟策中實現せられたる最成功せるもの一なり。

政府は以上產金の買占に依り、外國より購入すべき國內生活必需品の支拂資金に充當し居れり。

當國統計局發行の“Barometro E-conómico”調査に係る1928年以降1933年4月迄の是等產金額の月別及鑛種別統計下の如し。

(單位純量kg)

鑛種別	金鑛	砂金鑛	金及銅鑛	其他の鑛	計	古金
年月別						
1928年(平均月)	2.6	5.4	42.4	38.4	88.8	3.9
1929年同	1.3	3.7	49.0	31.6	85.6	4.4
1930年同	1.5	2.4	20.8	29.0	53.7	6.0
1931年同	4.8	4.0	13.5	33.2	55.5	7.3
1932年同	4.9	22.2	7.2	63.4	98.7	251.1
1932年4月	2.2	8.7	0.8	11.9	23.6	269.7
1933年1月	7.8	92.9	2.1	182.7	285.5	120.9
1933年2月	8.0	87.7	7.8	98.5	202.0	210.7
1933年3月	8.2	140.4	9.0	173.0	330.6	109.0
1933年4月	14.3	108.3	17.0	194.0	333.6	92.1

(海外經濟事情6年36號)

内外最近刊行誌參考記事目次

Steel, July 3, 1933

- Rolls for finishing stainless strip steel Require Mirror Surface. By Edward S. Heck. pp 25-27
Improving Open-Hearth furnace Design. Part V. By William C. Buell, Jr. pp 31-34

Steel, July 10, 1933

- Improving Open-Hearth furnace Design. Part VI. By William C. Buell, Jr. pp 32-33

Steel, July 17, 1933

- Is Service of 18-8 Forecast By Copper Sulphate Test? By V. B. Browne. pp 23-26
Improving Open-Hearth furnace Design. Part VII. By William C. Buell, Jr. pp 28-30

The Iron Age, July 6, 1933

- Modern Metallurgy.—A factor in the Jobbing Iron Foundry. By A. C. Denison. pp 15
Welding in the Steel Industry. By C. M. Taylor. pp 16-17
Gear Lapping after Heat Treatment. By R. S. Drummond. pp 18-21
Winged Ingot Improves Structure of Steel. By Donald G. Clark. pp 22-23

The Iron Age, July 13, 1933

- Growth of Gray Cast Irons. By Thomas J. Wood. pp 12-13
New Method for Determining Molybdenum in Alloy and Plain Steels. C. Morris Johnson. pp 16-17

The Iron Age, July 20, 1933

- Performance of Stainless steels. By Marcus A. Grossmann. pp 19
Abrasion-Resistant Castings. By William C. Hartmann. pp 20-21

Blast Furnace and Steel plant, June 1933

- Insulation of Open hearth furnaces. E. F. Entwistle. pp 303-311
The Aging of Mild Steel Sheets. R. O. Griffis, Reid L. Kenyon. pp 312-314
Cold Rolling of Sheets and of Tinplate. By W. Trinks. pp 315-320
Composition and Deoxidation of Iron Oxide Sinters. Part IV. T. L. Joseph, E. P. Barrett. pp 321-323.
Finishing the Heat of Steel. Part X. J. H. Hruska. pp 324-325
The Most Economical Size of Pipe for Transmitting Fluids. Part I. By Philip M. Galls. pp 326-327

Blast fce & Steel plant, July 1933

- Modern Practice in Cold Rolling. By W. Trinks. pp 359-361
Luminous versus Non-Luminous Flame.. for the Open-Hearth. Part I. By V. Balabanov. pp 362-363
Recent Developments in American Blast fce Design and Practice. By William A. Haven. pp 364-367
Antifriction Bearings for Hot and Cold Saws. Part I. By F. Waldorf. pp 368-371
Finishing the Heat of Steel. Part XI. By J. H. Hruska. pp 372-373
Oxy-Acetylene Welding and Cutting. By George C. Comstock. pp 374-375

Iron and Steel Industry, June 1933

- Patterns and Patternmaking. By E. Longden. pp 311-314
The Influence of Mo, W and Ti on Cast Iron. By J. E. Hurst. pp 315-316
Gas Power.—Engines, Power Output, Gas Consumption, Economy. F. Johnstone Talyor. pp 317-320

Iron and Steel Industry, July, 1933

- Notes on Cupola Practice. Robert McMahon. pp 335-338
The Height of Cupola Furnaces. Dr. Jerzy Buzek. pp 338-339
Gas Power.—Constructional Features of Modern Engines and Blowers Operating on B. F. and Coke Oven Gas. F. Johnstone Taylor. pp 341-345
The Estimation of P. in Foundry Iron, Steel and Similar Materials. pp 346-350

Metallurgia, June, 1933

- X-rays in the Metal Industries. R. A. Stephen, M.Sc. pp 35-36

- Some Metallurgical aspects of Stainless steel Welding. E. C. Rollason, M.Sc. pp 37-40
Rotary Piercing and Extrusion for Tube Manufacture. Gilbert Evans. pp 45-47
Repairs to Steel Furnaces. Walter Lister. pp 53-55

Journal of the American Welding Society, June, 1933

- Erecting Steel Buildings and Strengthening Steel Bridges By Welding. By Frank P. McKibben. pp 4-14
Some factors Governing the choice of Welding Electrodes. By Wayne A. Howard. pp 19-21
Spherical Tank Built by Arc Welding. By A. F. Davis. p 24

Foundry Trade Journal, July 6, 1933

- American progress in the use of Alloys in Cast Iron. F. B. Coyle. pp 7-11

Foundry Trade Journal, July 13, 1933

- American progress in the use of Alloys in Cast Iron. F. B. Coyle. pp 19-22

Die Giesserei, 9. Juni, 1933

- Der Zerfall des Eisenkabsids durch Katalyse. Dr. Phil. Franz Roll. pp 233-235
Kritische Betrachtungen über di Biegeprobe und Vorschläge über ein Kombiniertes prüfverfahren beim unlegierten Gusseisen. Von August Gimmy. pp 235-242
Kalkulationsprobleme beim Kundenguss. Dr. P. Goetze. pp 242-245

Die Giesserei, 23. Juni, 1933

- Bericht über die Hauptversammlung des Vereins deutscher Giessereifachleute. pp 257-268

Die Giesserei, 7. Juli, 1933

- Ueber die Aufkohlung von Giesseisen- und Stahlschrott durch Holzkohle, Koks, Graphit und Petrolkaks. H. Nipper und E. Piwowarsky. pp 277-280
Kritische Betrachtungen über die Biegeprobe und Vorschläge über ein Kombiniertes prüfverfahren beim unlegierten Gusseisen. Von August Gimmy. pp 280-287

Die Giesserei, Juli 1933

- Untersuchungen über den verschleiss von hochwertigen Grauguss und Legierten Grauguss unter Berücksichtigung der an Kolben und Zylinder von Verbrennungsmotoren gestellten Anforderungen. R. Knittel. pp 301-310

Die Giesserei, 4. August, 1933

- Die synthetische Herstellung von Kupolofentemperguss aus Schrottreichen Gattierungen ohne Temperroheisen. Von Dr.-Ing. Rudolf Stotz. pp 321-324
Untersuchungen über den Verschleiss von Rochwertigen Grauguss und legierten Grauguss unter Berücksichtigung der an Kolben und Zylinder von Verbrennungsmotoren gestellten Anforderungen. Von Dipl.-Ing. R. Knittel. pp 324-329
Die Katastrophe des Giessereinachwuchses. Von Friedrich Wellwig. pp 331-334

(及 川)

The Foundry, July, 1933

- Electric Furnace Iron Used for Piston Rings and Valve Tappets. Fred Erb and Edwin Bremer. pp. 25-26.
Molybdenum in Steel Castings. H W Gillett and J. L. Gregg. p 27
Wear Resistance of Malleable Iron. Rebecca Hall. pp. 28-29
Alloy Cast Iron with Titanium. G. F. Comstock. pp 32-33

Metal Industry (New York), July, 1933

- Melting Equipment in the Non-Ferrous Industry. R. H. Stone. pp. 241-244
Electroplating Generators. Charles J. Schwarz. pp. 245-246

The Metal Industry (London), June 2, 1933

- Birmingham Small Wares. F. Johnson. pp. 561-564.
Recent Developments in Bearing Metals. A. J. Murphy. pp. 565-569

The Metal Industry (London), June 9, 1933

- Birmingham Small Wares. F. Johnson. pp. 585-586
Recent Developments in Bearing Metals. A. J. Murphy. pp. 591-594
The Electrodeposition of Palladium. R. H. Atkinson and A. R. Raper. pp 595-598

The Metal Industry (London), June 16, 1933

The Lead Mines of the Peak. Gilbert E. Smicth. pp. 609-610

X-ray Analysis of Iron-Tin Alloys. W. F. Ehret and A. F. Westgren. pp. 611-613

Some Observations on the Corrosion of Lead. A. H. Loveless, T. A. S. Davie and W. Wright. pp. 614-616.

The Metal Industry (London), June 23, 1933

A Study of Six Bearing Bronzes. Oscar E. Harder and Carter. pp. 639-642

Practical Plating. Preparation of Work. III. Pickling. E. A. Ollard. pp. 643-645

The Metal Industry (London), June 30, 1933

Zinc in Dry Batteries. E. Schrader. pp. 659-662

A Study of Six Bearing Bronzes. Oscar E. Harder and Carter. S. Cole. pp. 666-667

The Metal Industry (London), July 7, 1933

Contact Metals and Contact Care. P. Mabb. pp. 3-5

The Control of Electrodepositing Solutions. XVI.—The Chromium Solution. Samuel Field. pp. 13-14

The Detection and Significance of Porosity in Electrodeposited Cadmium Coatings on Steel. S. G. Clarke. pp. 15-16

The Metal Industry (London), July 21, 1933

Modern Electrolytic Refining. pp. 51-52

The Mechanical and Chemical Properties of Alloys of Aluminium, with chromium, Iron, Magnesium, Manganese, Titanium and Vanadium. H. Bohner. pp. 56-58.

Practical Plating. The Deposition of Nickel.—Solutions. E. A. Ollard. pp. 59-60.

The Deposition and Significance of Porosity in Electrodeposited Cadmium Coatings on Steel S. G. Clarke. pp. 61-62

The Metal Industry (London), July 28, 1933

Surface Protection and Colouring of Aluminium. Herbert Kurrien. pp. 75-78

Beryllium-Copper Castings: Foundry Practice, Heat Treatment and Properties. Edwin F. Cone. pp. 79-81

The Metal Industry (London), Aug. 4, 1933

The Vertical Centrifugal Casting of Non-ferrous Alloys. R. C. Stockton. pp. 97-98

Beryllium-Copper Castings: Foundry Practice, Heat Treatment, and Properties. Edwin F. Cone. pp. 101-103

Practical Plating. The Deposition of Nickel.—Solutions. E. A. Ollard. pp. 107-109

The Detection and Significance of Porosity in Electrodeposited Cadmium Coatings on Steel. S. G. Clarke. pp. 109-110

The Metal Industry (London), Aug. 11, 1933

X-Ray Analysis of Metals and Alloys. John Iball. pp. 121-123

Goldsmiths' and Silversmiths' Work:—Past and Present. W. Augustus Steward. pp. 125-128

The Testing of Green Sands. Routine Methods Proposed by the I.B.F. pp. 131-133

Zeitschrift für Metallkunde, June, 1933

Moderne Metalldrahtziehereien. K. Bernhoeft. s. 125-127

Vereinfachte Kalibrierungsverfahren für das Auswalzen von Nichteisenmetallen. O. Emicke. s. 127-132

Ueber den Nachweise geringer Mengen von Eutektikum in Metallen durch Bestimmung der Zugfestigkeit in Abhängigkeit von der Temperatur. G. Tammann und H. J. Rocha. s. 133-134

Betrachtungen über das Erstarren von Metallblöcken. W. Roth. s. 134-137

Studien über Ausscheidungs-Härtung. Anomalien im Härteverlauf während des Härtungsvorganges. G. Masing und L. Koch. s. 137-139

Der Natriumgehalt des Silumins. E. Scheuer. s. 139-141

Die Aluminium Lichtbogenschweißung und einige Eigenschaften des Schweißmetalles. L. Anastasiadis. s. 141

Die Widerstauchschweißung der Nichteisenmetalle. M. Schwarz und F. Goldmann. s. 142-143

Korrosion von Magnesiumlegierungen. W. Kroenig und G. Kostylev. s. 144-145

Strukturänderungen am Zweistoffsystem Eisen-Kobalt. A. Schulze. s. 145-146 (若林)

Stahl und Eisen, Juli 6, 1933

Neuere Entwicklung von Rohrwalzverfahren. Fritz

Kocks. pp. 689-701

Eigenerzeugung, Werkskupplung, Fremdbezug und Abgabe von Strom innerhalb der Energieversorgung rheinisch-westfälischer Hüttenwerke. W. Martini. pp. 701-705

Stahl und Eisen, Juli 13, 1933

Der heutige Stand der Eisenindustrien der Welt. Otto Petersen. pp. 717-733

Korrosionserscheinungen an Teerdestillierblasen. pp. 734-736

Stahl und Eisen, Juli 20, 1933

Bau und Betrieb des neuen Thomasstahlwerkes der Firma Hoesch-Köln Neuessen A.-G. In Dortmund. Wilhelm Broel und Arthur Dittmar. pp. 749-758

Röntgennachweis der inneren Korrosion von Drahtseilen. Richard Glocker. pp. 758-761

Stahl und Eisen, Juli 27, 1933

Die Rotbruchigkeit Kupferhaltiger Stähle und ihre Vermeidung. Frong Nehl. pp. 773-779

Der Kampf gegen die Arbeitslosigkeit. August Kuster. p. 779-781

Archiv für das Eisenhüttenwesen, Juli 1933

Einfluss des Kieselsäuregehalts von Eisenerzen auf ihre Verhüttungskosten. Kurt Grethe. pp. 1-6

Forschungen über den Aufbau der phosphatschlacken und ihre Bedeutung für die Thomasmehlerzeugung. Friedrich Körber. pp. 7-20

Die Herstellung Schackenbeständigen Tiegel für den Kernlosen Induktions-Ofen. Heinz Siegel. pp. 21-23

Die Berechnung von Stossöfen Werner Heiligenstaedt. pp. 25-36

Anhaltzahlen für die Gasersparnis durch Vorwärmung. Gustav Neumann. pp. 37-40

Geschwindigkeit von Umwandlungen im festen Stahl. Edgar Collins Bain. pp. 41-48

Zur Frage der Anlasssprödigkeit. Edward Houdremont. pp. 49-59

Doppelnitrierung. Otto Hengstenberg. pp. 61-66

Richtlinien für die einheitliche Vorrechnung von Schmiedestücken. Hans Euler, Kurt Rammel. pp. 67-79

(及 川)

研究報告 第9號 住友伸銅鋼管株式會社 昭和8年7月

コムミューターバー用材質の研究 (第1報)

小磯 五郎 (597)

強韌耐海水性合金“S. N. B.”の接觸腐蝕試験

田邊友次郎、小磯五郎 (609)

食鹽水中に於けるアルミニウムに就て 五十嵐 勇 (619)

デュラルミンの常溫加工、焼戻及耐海水性 田邊友次郎 (624)

焼戻に依るデュラルミンの對鹽酸溶解性の變化に就て

堀 槌爾 (639)

デュラルミンの荷重腐蝕試験 田邊友次郎 (642)

鍛鍊マクネシウム合金の靜的及動的抗張試験

田村 正郎 (646)

加工金屬の燒鈍に際して起る熱起電力の變化に就て

五十嵐 勇 (648)

罐用鋼管腐蝕の一形態に就て 絹川武良司 (653)

金屬 Vol. III-No. 8 8月號

耐熱耐腐蝕性合金鑄鐵 藤原 唯義 (318)

金屬の熱膨脹に就て (2) 窪田格太郎 (326)

水中銲接 濱部 壽次 (330)

工業雜誌 第69卷 第872號 昭和8年8月

推進器材料としての滿俺青銅に就て 齋藤 彌平 (323)

機械學會誌 第36卷 第196號 昭和8年8月

乳化油と其の工業上の應用に就て、第1パネの焼入 (第1報)

松繩 信太 (503)

燃料油の壓縮率に就て 濱部源次郎、長尾不二夫 (518)

長手の溝が丸棒の振り彈性に與へる影響 西原 利夫 (521)

正多角形の切斷面を有する軸の振れに就て 津村 利光 (525)

工業の大日本 昭和8年7月15日 第30卷 第7號

電氣銲接部の耐腐蝕性試験 東 道生 (7)

電氣化學 昭和8年8月 第1卷 第3號

銅電氣製鍊に於ける密晶限界電壓並に析出銅組成に
關する研究 平社敏之助 (61)
高級爐材の發達と電熱の利用 (コルハート其の他)

北海道石炭鑛業會々報 第227號 昭和8年7月25日

選炭用空氣テーブルに對する一考察 佐野秀之助 (26)
水式選鑛の科學的基礎 松野 榮治 (47)

工 政 第161號 昭和8年8月號

北海道の鑛産資源 青柳 秀夫 (27)

電氣評論 第21卷 第8號 昭和8年8月10日

電氣鐵道用 H 型鐵柱設計に關する考察 中 村 守 (616)
クローム酸溶液より金屬クロームを電解析離
する方法の研究 大藪幸太郎 (637)

地學雜誌 第45年 第534號 昭和8年8月

常磐炭田に於ける炭礦聚落と飲料水 山口彌一郎 (38)

探鑛冶金月報 第11年 第8報 昭和8年8月15日

金鑛處理法研究の順序 渡邊 俊雄 (221)
熱河に於ける鑛産資源踏査の實話 上治寅次郎 (224)
濕式亞鉛製鍊焙燒鑛溶解濾過滓中含有する鉛
の回收に關する研究 仲 田 旭 (230)

燃料協會誌 第12年8月號

ガス眞溫度の測定法に就て 内田 俊一 (1007)
骸炭工業最近の發達 ハンス、ハインリッヒ、コッパース (1020)
木炭の品質に關して 河合九洲夫 (1033)

東京工業大學々報 第2卷 第8號 昭和8年8月

動力計としての直流機 小澤 省吾 (443)
ポルトランドセメントのマグネシア含有量に就て¹⁾

近藤清治、和田貞次 (477)
アルミ酸カルシウムの研究 (第4報)¹⁾ 凝結時間及耐壓力
近藤清治、山内俊吉 (504)

海外經濟事情 第6年 第33號 昭和8年8月21日

國際生鋼カルテルの組織要綱 (昭和8年6月27日附在白
山形臨時代理大使報告) (49)
石炭輸入移入狀況 (廣東) (昭和8年6月15日附在廣東
吉田總領事代理報告)

鑄接協會誌 第3卷 第4號 昭和8年8月

水道用電氣鑄接鋼管と其の技術的考察 氏家竹次郎 (195)
高力鋼電弧鑄接法の研究 岡 田 實 (202)
鑄接設計法概論 (1) 高橋 逸夫 (235)

日本ニッケル情報局技術彙報

特殊鑄鐵ニ・ハー D (1) 藤原 唯義 (1)

金屬の研究 第10卷 第8號 昭和8年8月

ダイス鋼の熱處理による諸性質の變化
村上武次郎、八田篤敬 (331)

膠質劑を添加したる硫酸亞鉛液より亞鉛を電着せしむる
場合の分極電位差に就て (其の1) 石原富松外2名 (365)
鹽浴用鹽類の平衡狀態圖の研究 (第2報) 佐藤 知雄 (383)
鑄滓の粘性測定法に就て (1) 松山 芳治 (338)
輕合金の物理と化學 (VII) 遠藤岸郎、徳永正勝 (345)

日本鑛業會誌 第49卷 第580號 昭和8年8月

歐米炭礦視察談 里村 靜一 (607)
亞鉛電解に關する研究、第2報 電流能率の連續的
測定及び不純物の影響 小川 芳樹 (617)

電氣收銅に於ける密晶限界電流密度及電壓と
析出銅組成に關する研究 平社敏之助 (628)

日本化學會誌 第54帙 第8號 昭和8年8月28日

無機化合物の水分研究 (第2報) 恒水蒸氣壓
中に於ける小戸酸性白土の水分に就て 中 本 實 (717)
オキシ法による金屬の定量及分離と水素イ
オン濃度との關係に就て 後藤 秀弘 (725)
タリウム及インヂウムの定量 (熱天料による
重量分析研究 其十六) 武野 良二 (741)
アマルガムの還元作用に就て (第1報) 益田 苦良 (743)
定性分析に於ける磷酸根の影響除去に關する
研究 (第3報)¹⁾ 錫法 石丸 三郎 (747)
合金の燒炭硬化に關する研究 (第3報) アルミニウムを
主成分とする銅、アルミニウム合金の燒炭中に起る硬度
の變化 (其の一) 川 合 潔 (754)

電氣製鋼 第9卷 第8號 昭和8年8月15日

電氣爐製鐵理論 (其の二) 向山 幹夫 (293)
電氣製鋼法の新傾向 (其の三) 川崎舍恒三、林 達夫 (319)
麻留田組織鑄鐵に就て (1) 牛塚龜太郎 (324)

大日本鑛業協會雜誌 第41集 昭和8年9月1日

マグネシア耐火物に就て (第3報) 收縮、粉
末度及成型壓 近藤清治、吉田 博 (497)

工學院同窓會誌 第35卷 第9號

電氣鑄接に就て (下) 吉田多賀雄 (630)

北 光 第35號 昭和8年8月1日

銅熔鑄爐製鍊の進歩 池田 謙二 (1)
高燐炭の酸素吸收 米澤治太郎 (9)
蘇國に於ける油頁岩鑛業概要 大橋 備治 (23)
比重瓶による密度測定計算式の精度 的場 鞠哉 (29)
X 線による金屬構造解析一例 脇 雄 藏 (36)

電氣化學 第1卷 第3號 昭和8年9月

滿洲と輕金屬工業 栗原 鑑司 (91)
電氣事業の統制と化學工業用電力 澁澤 元治 (93)
金屬マグネシウム電解製造法 所要製造費の
大なる點—其の對策私案 加藤與五郎外2名 (103)
弗化物法による酸化マグネシウムよりのマグネシウム製造に
關する研究 (第1報) 浴組成の研究 伏屋義一郎外2名 (109)

海外經濟事情 第6年 第35號 昭和8年9月4日

諸外國對日貿易概況 (スマトラ東海岸州、葡領モザンロツク)
(1)

獨逸經濟界概観 (1932年) (昭和8年6月30日附
在獨今井商務書記事務代理報告)

石炭時報 第8卷 第9號 昭和8年9月5日

標準型檢定器による炭塵の可燃性測定實驗 長谷川忠男 (11)
熱風熔滓式瓦斯發生爐に就て 保坂 文藏 (29)

應用物理 第2卷 第9號 昭和8年9月

鐵單結晶の殘留磁氣 茅 誠 司 (342)

機械學會誌 第36卷 第197號 昭和8年9月

合金が變態する時の強さに就て 山口圭次、中村晃三 (605)
雄ねぢの有効直徑測定に關する二三の問題 佐々木重雄 (612)
工作機械に就ての所感 佐藤武三郎 (620)

自然科學と博物館 第45號 9月號

新收新潟縣川内産輝水鉛鑛に就いて 本多 厚二 (12)

昭和8年7月中(八幡)製鐵所銑鋼生産高表 (單位噸)

銑 鐵			鋼 塊			鋼 材		
當月生産高	前月比較	1月以降累計	當月生産高	前月比較	1月以降累計	當月生産高	前月比較	1月以降累計
85,860	+ 13	563,534	130,050	+ 5,544	879,879	93,201	- 8,079	694,431

主要製鐵所に於ける鐵鋼材生産表 (單位噸)

(商工省鑛山局)

— 減

品 目	7 月 分			1 月 以 降 累 計			
	昭和8年	昭和7年	比較増減	昭和8年	昭和7年	比較増減	%
銑 鐵 { 内地朝鮮	137,966	96,329	41,637	853,116	691,202	16,1914	23
普 通 { 滿洲鋼片	36,479	39,223	- 3,149	260,269	222,792	37,477	16
販 賣 { 通 向 鋼	258,506	184,145	74,361	1,733,834	1,316,834	417,000	31
シ ー ト { 一 品	5,580	5,788	- 208	61,695	38,673	23,022	59
鍛 造 { 鋼 材	10,062	8,273	1,789	77,350	91,315	- 13,965	15
普 通 { 鋼 壓 延 鋼 材	5,018	2,376	2,642	30,930	12,799	18,131	141
	189,237	140,635	48,602	1,375,553	1,085,488	290,065	26
普 通 鋼 壓 延 鋼 材 内 譯							
厚 0.7mm以下鋼板	24,687	20,120	4,567	179,244	175,208	4,036	2
其 他 鋼 板	35,267	22,845	12,422	260,471	166,091	94,380	56
棒 形 鋼 條	47,548	34,393	13,155	359,449	287,605	71,842	24
軌 道 鋼 材	26,595	17,008	9,587	196,512	141,054	55,458	39
線 鋼 材	20,439	21,467	- 1,028	136,145	127,762	8,383	6
其 他 鋼 材	22,934	15,523	7,411	153,095	118,976	34,033	28
管 他	8,941	7,269	1,672	71,115	55,247	15,868	28
	2,826	2,010	816	19,560	13,454	6,015	44

昭和8年外國銑輸入高 (單位噸)

(銑鐵共同販賣會社)

月 次	輸 出 國 名						計
	印 度	英 國	獨 逸	米 國	瑞 典	其 他	
1	2,450	51	—	—	—	—	2,501
2	5,052	406	—	—	—	—	5,458
3	11,338	—	—	—	—	—	11,338
4	10,711	—	—	—	—	—	10,711
5	14,439	1,016	100	—	—	4,551	20,106
6	25,760	711	—	101	—	450	27,022
7	17,153	508	—	—	4,002	—	21,663
計	86,903	2,692	100	101	4,002	5,001	98,799

昭和8年6月中重要生産月報抜萃 (商工大臣官房統計課)

	6 月 中	前 月	前年同月	1 月 以 降 累 計	
				昭和8年	昭和7年
金 (gr)	1,070,234	1,104,602	972,946	6,375,893	6,014,259
銀 (gr)	14,072,837	15,083,552	12,656,824	83,663,073	76,522,995
銅 (kg)	5,427,377	5,640,069	5,899,356	34,465,663	35,886,772
硫 黃 (tons)	8,705	8,634	6,466	47,775	33,751
石 炭 (tons)	2,422,166	2,488,672	2,141,257	14,377,545	13,304,900
油 (原油) (100l)	178,814	187,773	205,943	1,092,185	1,299,922
石 油 (重油) (tons)	355,741	443,753	292,630	2,333,792	1,844,837
過 磷酸 灰 (")	85,147	91,846	68,831	586,837	542,546
硫 安 (")	67,218	62,846	59,172	335,607	347,691